性役割態度と対人魅力[1)]

井上　徹[2)]
田中国夫

「縁は異なもの味なもの」という言葉がある。男女の縁は常識を越えた不思議でおもしろいものという意味である。男女の結び付きに限らず，我々は日常様々な人々との出会いを経験しており，無数の出会いのなかから知り合いを作り，親しい友人を作っている。このような人と人との出会いにおいて，人がその人を好きになるメカニズム，対人魅力に焦点をあてた研究が最近特に増加しており，理論的概念的枠付けも徐々に整備されている（Huston, 1974；Duck, 1977）。特に対人魅力研究の理論的裏付けとなっているのは，認知理論と強化理論である。認知論的アプローチは，人が認知的均衡状態に快を感じ，認知的不均衡による緊張状態や不快感を避けようとするという考え方に立っている。Newcomb（1961）の認知理論に基づくフィールド研究において，友情の形成に最も重要な要因の一つとされたのは，二人の人（A，B）が他の第三者（X）についてどう感じているかということであった。例えば，Aが「いい奴」だと認知するXを，Bも「いい奴」だと認知しているとAが認知すれば（実際はどうであれ），Aにおける認知の均衡が保たれ，AはBに対してポジティブな態度を抱くようになる。Newcombによれば，この他者に対するポジティブな態度が魅力にほかならないとされている。認知理論はさまざまな対人魅力の諸側面，特にバランスの程度に応じた人々の感情（情緒）の説明や，認知の不均衡によって動機付けられる行動の予測に有効であるとされている（Baron & Byrne, 1977）。一般に認知理論に基づく説明は，人の認知的側面を強調し，人の内側から魅力の生起を問題にしている。

一方，人々の周囲に存在する刺激事象に研究の焦点をあてるのが強化理論の立場である。強化理論に基づく体系だった説明は，Lott & Lott（1974），Clore & Byrne（1974），Griffitt（1974），Clore（1975）などにみられるが，強化理論の基本的な説明原理は次の通りである。

1）我々は，周囲の刺激を報酬を与えるものか罰を与えるものか，どちらかに同一視する。また報酬を与えるものに近づこうとし，罰を与えるものから遠ざかろうとする。

2）報酬を与える刺激は快の感情を呼び起こし，罰を与える刺激は不快の感情を呼び起こす。

3）刺激についての「良い—悪い」の評価は，その刺激が快の感情を起こすか，不快の感情を起こすかによって決定される。また生起した感情の程度によって，評価の程度も決定される。

4）ニュートラルな刺激でも報酬や罰と結び付くと，単純な条件付けを通して快の感情や不快の感情を生起することになり，その結果好まれたり嫌われたりする。ニュートラルな刺激が人である場合でも，報酬と結び付いた場合には好かれ，罰と結び付いた場合には嫌われることになる。

このように強化理論では，刺激（他者）の特徴とそれに対して生じる認知者の感情反応に注目している。これに従ってByrneや共同研究者たちは，魅力を「他者から受けるポジティブな強化の正の一次関数」と定義して多様な研究を行なっている。特に類似する態度は，一致的妥当性（consensual validity）などによって正の強化因とな

1）Sex role attitudes and interpersonal attraction

2）論文作成にあたって，関西学院大学社会学部中里浩明氏より助言を得た。ここに謝意を表する。

り，逆に非類似の態度は負の強化因となる。Byrne & Nelson (1965) は，魅力を「類似する態度の割合の一次関数」であると結論し，Y＝5.44X＋6.62 (Y：魅力，X：類似する態度の割合) の公式を発表している。この態度の類似性と対人魅力の強い関係は，刺激人物の提示方法を変えても (Byrne & Clore, 1966)，重要度の異なる態度対象を用いても (Clore & Baldridge, 1968)，その効果は変わらず，異なる集団や (Byrne, et als., 1969)，日常的な場面 (Byrne, Ervin, & Lamberth, 1970) にも一般化可能であった。しかし，非常に不快な特性をもつ人物 (Taylor & Mettee, 1971) や麻薬の常用者 (Lerner & Agar, 1972) との類似は魅力を引き起こさないという研究も出ており，最近では，どのような条件下で非類似が魅力を導くかが問題の一つになっている。

相手との非類似による魅力の生起については，魅力の相補説の形で従来から問題にされていた。相補説の代表的な研究としては Winch et als. (1954) があげられる。彼らは，人々は自分の欲求を最大限に満たしてくれる人を配偶者として選ぶと考え，25組の夫婦に面接調査を行なって，この欲求の相補説を確認している。しかしこの Winch らの相補説は，相補関係を決定する上での明確な理論的根拠を欠いていたこともあって，この後必らずしも一貫した支持を受けていない。

最近では，人物の果たす社会的役割の点から非類似—魅力の関係が考えられている。その一つは Seyfried & Hendrick (1973) の研究である。彼らは，役割期待の概念こそ類似説と相補説を統合しうるものと考え，男女被験者の性役割に対する態度を取り上げ，異性間での魅力の相補性を証明しようとした。女子被験者については仮説通り，男性には男らしい人物が，女性には女らしい人物が好まれた。しかし，男子被験者は女らしい女性人物に対すると同様，男らしい女性人物に対しても好意を示したため，異性に対する相補説は男子被験者では認められなかった。

本研究ではこの Seyfried & Hendrick の研究に基づき，男女の社会的役割すなわち性役割の差に注目して対人魅力の規定因を考察する。

男性・女性の性差が生物学上の差であると同時に，社会的に付与された役割行動の差を伴っていることはよく知られている。星野 (1968) は，特に青年期における性役割獲得の重要性について述べ，幼児期・児童期だけでなく，性役割獲得は青年期・壮年期においても重要な発達課題の一つであるとしている。青年期の男女にとって，成人としての社会的適応，また結婚生活における適応的関係の維持のためにも，性役割獲得の問題は重要な意味を持つに違いない。またこのような社会的に要請される性役割獲得の問題と，個人的な人に対する好き嫌い，友人形成といった対人魅力の問題を合わせて考えることは，社会と個人の相互作用という大きな問題をも提供してくれるものと思われる。しかし現在までのところ，幼児・児童期における性役割獲得については発達心理学の領域において多くの研究がなされているが (深谷，1965；小橋川他，1967，1968)，青年期や成人を対象とした研究は，高橋 (1970) も指摘するように数少ないといわねばならない。また一般的によく用いられる「男らしさ—女らしさ」の概念もかなり曖昧なままに残されている (柏木，1973)。Seyfried & Hendrick (1973) は，Guilford-Zimmerman Temperament Scale から，役割の相互作用性を重視した Masculine-Feminine Preference Test を作成し，これによって性役割態度を測定している。しかし本研究では，既存のテストのなかで最も性役割態度の測定にふさわしいと考えられる，日本版 MMPI 性格検査 (阿部他，1963) の性度尺度の項目を使用することにした。この尺度は興味関心の型がどれほど男性的か女性的か測定するものである。本研究ではこれによって，男らしい興味関心を示す人物を男らしい役割態度を持つ人物，女らしい興味関心を示す人物を女らしい役割態度を持つ人物とした。また Seyfried & Hendrick (1973) の研究では，被験者の要因として性差を取り上げるだけであったが，本研究では被験者自身の性役割態度についても考慮し，より精細な分析をめざした。

本研究の仮説は次の通りである。

1) 同性に対しては，役割態度の類似性から，自分と類似した人物により魅力を感じるだろう。

2) 異性に対しては，役割期待の観点から，男性は女らしい女性に，女性は男らしい男性に

より魅力を感じるだろう。

3）従って，異性に対しては，被験者の持つ役割態度によって，類似説と相補説の両方が支持されるだろう。すなわち，男らしい男子被験者と女らしい女子被験者は相補説によって，女らしい男子被験者と男らしい女子被験者は類似説によって相手に対する魅力を高めると考えられる。

方　法

被験者　関西学院大学男子学生89名，女子学生84名。このなかで男子5名，女子4名は記入の不備のため除かれた。被験者は被験者自身の男らしさ・女らしさ得点に基づいて，男女ごとに Hi 群（男らしい役割態度を示す群）と Lo 群（女らしい態度を示す群）に分けられた。また各条件の人数を等しく取ったため，最終的に男子40名，女子40名のデータが分析にかけられた。

興味関心調査票　被験者自身の興味関心からみた男らしさ・女らしさを測定するため用意された。日本版 MMPI 性格検査の性度尺度項目のなかから，男らしさを示す13項目，女らしさを示す13項目を選び，関係のない5項目とともに計31項目をランダムに配列した。男らしい反応に対して1点，女らしい反応に対して0点を与えて総計し，これを被験者の男らしさ・女らしさ得点とした。最も男らしい反応は26点，最も女らしい反応は0点となる。

刺激材料　未知の刺激人物は，興味関心調査票短縮版によって被験者に提示された。短縮版は，先の興味関心調査票で用いた男らしさを示す13項目，もしくは女らしさを示す13項目からなっており，男らしい人物は13項目のうち11項目に男らしい反応を，逆に女らしい人物は13項目のうち11項目に女らしい反応を示すよう操作された。

対人判断尺度　刺激人物に対する被験者の評定は対人判断尺度によってなされた。この尺度は，刺激人物との類似を測定する2尺度，男性あるいは女性としてのふさわしさを測定する2尺度，魅力を測定する4尺度さらに8つの特性形容詞の尺度からなっている。いずれも7ポイントの線分尺度で，両端には「非常に〜」「全く〜でない」と記してある。

手続き　集団面接法によって，適当な教示を与えながら実験が行なわれた。被験者には，「限られた情報にもとづく対人判断の正確さ」についての実験であると伝え，興味関心調査票と封筒に入った2組の調査票短縮版及び対人判断尺度を配布する。興味関心調査票に従って，被験者に自分自身の興味関心について記入させた後，これを封筒中の2組の短縮版及び対人判断尺度と入れかえさせ，短縮版に示された2名の未知の人物を順次評定させる。評定の順序効果を除くため，半数の被験者には最初に男らしい人物を，また半数の被験者には最初に女らしい人物を評定させた。なお被験者は同性の人物2名もしくは異性の人物2名についての評定を行なった。

結　果

被験者の分類　各条件に割り当てられた被験者の男らしさ・女らしさの平均得点は Table 1 の通りである。男女被験者とも，男らしい役割態度を示す Hi 群と，女らしい役割態度を示す Lo 群の間に有意な平均得点の差がみられた〔Male : $t(38)=11.59$, $P<.01$, Female : $t(38)=12.95$, $P<.01$〕。しかし各群とも，男性の刺激人物を評定した群と，女性の刺激人物を評定した群に有意な差はなかった。一方，男子被験者と女子被験者の差が，Hi, Lo 各群内でみられた〔Hi 群 : $t(38)=7.43$, $P<.01$, Lo 群 : $t(38)=6.84$, $P<.01$〕。従って，以下の分析は男女被験者ごとに行なわれた。

Table 1　Mean Masculinity-Femininity scores of subjects in each condition

	Male Subjects		Female Subjects	
	Male SP[2]	Female SP	Male SP	Female SP
Hi[1]	16.1[3]	15.1	13.1	12.9
Lo	11.1	10.3	7.5	7.1

Note　1) Hi : Masculine Subjects
　　Lo : Feminine Subjects
　　2) SP : Stimulus Person
　　3) Possible range is 0—26.
　　n=10 in each cell

なお分散分析は，Keppel (1973) 及び Winer (1971) に従って3要因 repeated measure A×B×(C×S) の分析を行なった。3つの要因は，A：刺激人物の性，B：被験者の男らしさ・女らし

さ，C：刺激人物の男らしさ・女らしさである。

知覚された類似性　知覚された類似性は，次の2つの尺度項目によって測定された。

1）あなたは，この人とパーソナリティ(性格)がどれくらい類似していると思いますか。

2）いろいろな話題に関して討論した場合，あなたはこの人とどれくらい意見が一致すると思いますか。

この2尺度間の相関係数は，r=.95となり高い値を示したため，2尺度を合わせて類似性の得点とした。男女被験者とも，被験者自身の男らしさ・女らしさ×刺激人物の男らしさ・女らしさについての交互作用がみられた〔Male：F (1, 36)=39.10, P<.01, Female：F (1, 36)=59.60, P<.01〕。すなわち男女被験者とも，刺激人物の性に関係なく，男らしい被験者（Hi 群）は男らしい人物と，女らしい被験者（Lo 群）は女らしい人物と類似していると知覚している。単純主効果検定の結果もすべてこの結果を支持していた。男らしい刺激人物に対しては Hi 群がより類似していると知覚し〔Male：F (1, 38)=28.29, P<.01, Female：F (1, 38)=17.51, P<.01〕，女らしい人物に対しては Lo 群がより類似していると知覚していた〔Male：F (1, 38)=15.88, P<.01, Female：F (1, 38)=22.97, P<.01〕。これらの結果から，被験者は刺激人物の性よりも，その人物の示した性役割態度を類似性の手がかりとして用いたといえる。従って，性役割態度の差として設定した実験条件が，被験者に“正しく”知覚されたといえる。

ふさわしさ　刺激人物の各性についてのふさわしは，以下の2つの尺度項目によって測定された。

1）あなたは，この人がどれくらい男らしい（あるいは女らしい）役割をはたすと思いますか。

2）あなたは，この人を男性として（あるいは女性として）どれほどふさわしい人だと思いますか。

2尺度間に高い相関係数 r=.76 を得たので，2つを合わせてふさわしさ得点とした。男女被験者とも刺激人物の性×刺激人物の男らしさ・女らしさ〔Male：F (1, 36)=13.83, P<.01, Female：F (1, 36)=35.22, P<.01〕及び被験者の男らしさ・女らしさ×刺激人物の男らしさ・女らしさ〔Male：F (1, 36)=7.00, P<.05, Female：F (1, 36)=8.80, P<.01〕に有意な交互作用がみられた。

まず第一の交互作用である，刺激人物の性×刺激人物の男らしさ・女らしさについて単純主効果を検討する。男子被験者は，男性は男らしい人物が〔F (1, 19)=5.17, P<.05〕，女性は女らしい人物が〔F (1, 19)=9.42, P<.01〕ふさわしいとしている。また女らしさは女性にとってふさわしいとみているが〔F (1, 38)=19.83, P<.01〕，男らしい人物についての性の単純主効果はみられず〔F (1, 38)=2.79, ns〕，男らしさが男性に限られたものではないことを示している。女子被験者についてはすべての単純主効果が有意であった。男性は男らしい人物が〔F (1, 19)=7.40, P<.05〕，女性は女らしい人物が〔F (1, 19)=51.60, P<.01〕よりふさわしいとみられており，男らしさは男性にとってふさわしいものであり〔F (1, 38)=14.07, P<.01〕，女らしさは女性にとってふさわしいものとされている〔F (1, 38)=11.98, P<.01〕。男子被験者が男らしさは男性に限ったものではなく，女性に対しても容認しようとしているのに対して，女子被験者は男らしさは男性，女らしさは女性と割り切った考えを示しており対照的であるといえる。

ふさわしさについての第二の重要な交互作用は，被験者の男らしさ・女らしさ×刺激人物の男らしさ・女らしさにみられた。男子被験者に関しては，男らしい人物に対する評定において，男らしさの高い群（Hi 群）と低い群（Lo 群）の間に有意な単純主効果がみられた〔F (1, 38)=4.21, P<.01〕。これは Hi 群が Lo 群よりも男らしい人物をよりふさわしいとみたことを示している。また Lo 群が Hi 群に比べて，女らしい人物をよりふさわしいとみる傾向がみられた〔F (1, 38)=3.56, P<.10〕。従って男子被験者は，Hi 群は男らしい人物，Lo 群は女らしい人物，と自分と類似する人物をよりふさわしいとみる傾向がある。しかしこの他の単純主効果はいずれも有意でなく，著しい特徴としては現われていないといえる。女子被験者については，いずれの単純主効果も有意

ではなかった。しかし男らしい人物については，男らしさの高い群（Hi 群）が，男らしさの低い群（Lo 群）に比べてよりふさわしいとみる傾向があり〔$F(1, 38)=3.88$, $P<.10$〕，Lo 群は女らしい人物をよりふさわしいとみる傾向にあった〔$F(1, 19)=3.32$, $P<.10$〕。男子被験者と同様，自分と類似した役割態度を持つ人物をよりふさわしいとみる傾向があるが，これも著しい特徴としては現われていない。

以上二つの重要な交互作用とともに，男子被験者については，刺激人物の性についての主効果がみられ〔$F(1, 36)=5.59$, $P<.05$〕，女性の人物に対するふさわしさ得点が有意に高いことを示した。これは Table 2 の平均得点からみて，女らしい女性の刺激人物に対する評定が他に比べて非常に高く，男らしい女性に対する評定も，他に比べて低くなかったことによるものと思われる。女子被験者については，刺激人物の性×被験者の男らしさ・女らしさの交互作用がみられた〔$F(1, 36)=8.43$, $P<.01$〕。女性の刺激人物に対する評定で，Hi 群のほうが有意に高かったためであるが〔$F(1, 38)=5.00$, $P<.05$〕，これは Hi 群の被験者が，女らしい女性の人物とともに男らしい女性の人物をも，女性としてふさわしいと知覚したためと思われる。この結果は，第一の交互作用で得られた結果に制限を加えることになる。すなわち，女子被験者は男らしさは男性に，女らしさは女性にとってよりふさわしいとする傾向があるが，Hi 群については，女らしい女性をよりふさわしいと知覚するとともに，男らしい女性のふさわしさも認めているといえる。

Table 2　Mean similarity, appropriateness, and attraction ratings

	Subjects \ Stimulus Person		Male SP Mas.[1]	Male SP Fem.	Female SP Mas.	Female SP Fem.
Similarity[2]	Male	Hi	9.2	4.8	9.6	8.0
		Lo	6.4	9.8	5.4	9.2
	Female	Hi	8.7	5.5	8.8	6.8
		Lo	7.2	9.1	4.4	9.3
Appropriateness[3]	Male	Hi	10.4	5.2	7.8	9.4
		Lo	7.5	7.7	7.2	10.3
	Female	Hi	9.8	5.4	8.1	10.2
		Lo	9.2	8.6	5.6	9.2
Attraction[4]	Male	Hi	17.8	9.1	16.0	17.9
		Lo	11.7	15.0	11.7	18.0
	Female	Hi	18.2	9.6	15.4	14.2
		Lo	13.1	14.4	10.1	16.3

Note　1) Mas. : Masculine　Fem. : Feminine
2), 3) Possible range is 2—14.
4)　Possible range is 4—28.

魅力　被験者が刺激人物に対して抱いた魅力は，以下の4つの尺度項目によって測定された。

1）あなたは，この人にどれほど好感を持てますか。
2）あなたは，この人と交際すればどのくらい楽しいと思いますか。
3）あなたは，この人をどのくらい賞賛したいと思いますか。
4）この人は，あなたの理想の人物にどのくらい近いと思いますか。

尺度間の相関係数は，$r_{1.2}=.77$, $r_{1.3}=.64$, $r_{1.4}=.73$, $r_{2.3}=.62$, $r_{2.4}=.67$, $r_{3.4}=.78$ となり，4つの尺度に対する反応を合計して魅力の指標とした。

〔男子被験者〕　まず男子被験者については Table 3 にみられるように，刺激人物の性×被験者の男らしさ・女らしさ×刺激人物の男らしさ・女らしさの三元の交互作用が有意であった〔$F(1, 36)=4.16$, $P<.05$〕。そのため Keppel (1973, p. 263) の図式に従って単純交互作用の検定を行なった。各レベルでの単純交互作用と単純主効果の結果は以下の通りである。

1）刺激人物の男らしさ・女らしさ

男らしい人物に対して，Hi 群の被験者が有意に高い魅力得点を示した〔$F(1, 36)=10.89$, $P<.01$〕。また女らしい人物に対しては，被験者の男らしさ・女らしさ×刺激人物の性の交互作用がみられた〔$F(1, 36)=31.23$, $P<.01$〕。単純主効果は，Hi 群が女らしい男性よりも女らしい女性を有意に高く評定したこと〔$F(1, 36)=23.16$, $P<.01$〕，また女らしい男性に対する魅力評定で，Hi 群と Lo 群に有意な差があること〔$F(1, 36)=10.41$, $P<.01$〕を示した。

2）男性の刺激人物について

被験者の男らしさ・女らしさ×刺激人物の男らしさ・女らしさの交互作用がみられた〔$F(1, 39)=17.0$, $P<.05$〕。単純主効果検定によると，Hi

群は Lo 群よりも男らしい男性の刺激人物により魅力を感じており〔F (1, 18)＝7.58, P<.05〕，逆に Lo 群は Hi 群よりも女らしい男性の人物に有意に高い魅力を感じていた〔F (1, 18)＝12.69, P<.01〕。また Hi 群には，男らしい男性人物と女らしい男性人物に対する評定に有意な差があり〔F (1, 19)＝23.16, P<.01〕，Hi 群のほうが，同性の人物に対する好みをはっきり示しているといえる。

3）女性の刺激人物について

刺激人物の男らしさ・女らしさについて主効果がみられた〔F (1, 18)＝5.15, P<.05〕。これは男子の被験者が，男らしい女性よりも女らしい女性をより魅力的だと評定したことを示している。

4）被験者の男らしさ・女らしさ

男子被験者の Hi 群では，刺激人物の性×刺激人物の男らしさ・女らしさの交互作用がみられた〔F (1, 18)＝11.15, P<.01〕。単純主効果からは，女らしい女性に対するよりも女らしい男性に対する魅力評定が有意に低かったことがわかる〔F (1, 18)＝21.26, P<.01〕。これは先ほどの 2）における結果と一致している。また Lo 群については，刺激人物の男らしさ・女らしさに有意な主効果がみられ〔F (1, 18)＝8.07, P<.05〕，刺激人物の性別に関わらず，Lo 群は女らしい刺激人物に対してより高い魅力を示していた。

以上男子被験者についての結果を総合すると次のようにまとめられる。Hi 群については，同性に対する魅力の類似説が明瞭に認められ，自分と同じ男らしい男性に対してより魅力を感じている。しかし異性に対しては，男らしい女性に対する評定と，女らしい女性に対する評定に差はなく，相補説は支持されなかった。また Lo 群では，異性に対する魅力の類似説が認められ，女らしい女性に対する魅力評定が有意に高くなっている。同性に対する類似説は異性に対するほど明瞭には認められなかった。

〔女子被験者〕　女子の被験者については，二元の交互作用が 2 つ認められた。

まず刺激人物の性×刺激人物の男らしさ・女らしさの交互作用〔F (1, 36)＝12.00, P<.01〕をみると，女らしい刺激人物について性差がみられ〔F (1, 38)＝6.24, P<.05〕，女らしい女性よりも女らしい男性の魅力がより低かったといえる。他の単純主効果は有意ではなかった。

一方，被験者の男らしさ・女らしさ×刺激人物の男らしさ・女らしさの交互作用〔F (1, 36)＝23.84, P<.01〕については，すべての単純主効果が有意であった。まず男らしい人物に対しては，Lo 群よりも Hi 群が〔F (1, 38)＝12.09, P<.01〕，また女らしい人物に対しては，Hi 群よりも Lo 群が〔F (1, 38)＝7.51, P<.05〕より魅力を感じている。Hi 群は女らしい人物よりも，男らしい人物により高い魅力を示しており〔F (1, 19)＝12.74, P<.01〕，Lo 群は男らしい人物よりも，女らしい人物により魅力を感じている〔F (1, 19)＝6.46, P<.05〕。

以上，女子被験者の結果をまとめると，まず女らしい男性人物に対する魅力が全体に低かった。また Hi 群，Lo 群ともに，自分と類似する役割態度をもつ人物により魅力を感じており，魅力の類似説が支持されている。なお三元の交互作用としては現われていないが，Hi 群と Lo 群では魅力評定のパターンに若干の差があるように思われる。すなわち平均評定点をみると，Hi 群は異性に対する評定で差があり，男らしい男性により高い魅力を示していた〔t (9)＝5.79, P<.01〕。ま

Table 3　Analysis of variance of attraction ratings

		Male Subjects			Female Subjects		
	df	*MS*	*F*	*P*[2]	*MS*	*F*	*P*
A[1]	1	125.60	8.52	**	0.61	< 1	
B	1	24.20	1.65		15.31	< 1	
AB	1	20.00	1.36		10.51	< 1	
err. betw.	36	14.67			19.65		
C	1	9.20	< 1		6.61	< 1	
AC	1	231.20	8.93	**	188.26	12.00	**
BC	1	235.40	9.09	**	374.11	23.84	**
ABC	1	107.90	4.16	*	17.81	1.14	
err. within	36	25.89			15.69		

Note　1) A : Stranger's Sex (Male—Female)
B : Subject's Group (Hi—Lo)
C : Stranger's Fashion (Masculine—Feminine)
2) ** : P<.01　　* : P<.05

た Lo 群は同性に対する評定で有意な差をみせており，女らしい女性をより高く評定していた〔$t(9)=5.29$, $P<.01$〕。

特性形容詞　刺激人物の特性評定に用いられた形容詞は次の8つである。知的な，気持ちの細やかな，意志強固な，謙遜な，消極的な，理性的な，線の太い，依存的な。この8つの形容詞のうち5つの形容詞において，男女被験者ともに，刺激人物の男らしさ・女らしさについての有意な主効果がみられた。予想された通り，男らしい刺激人物は，より意志強固で〔Male : F (df はいずれも 1, 36) $=24.77$, $P<.01$, Female : $F=32.94$, $P<.01$〕，線が太い〔Male : $F=15.89$, $P<.01$〕とみられ，逆に女らし人物は，より気持ちが細やかで〔Male : $F=14.95$, $P<.01$, Female : $F=33.48$, $P<.01$〕，謙遜で〔Male : $F=17.11$, $P<.01$, Female : $F=22.25$, $P<.01$〕，依存的である〔Male : $F=23.75$, $P<.01$, Female : $F=23.10$, $P<.01$〕と判断されている。さらに女子被験者は，女らしい人物をより消極的であるとしている〔$F=27.10$, $P<.01$〕。従ってこの特性形容詞に対する評定の点からも，設定した刺激人物が，男らしさ・女らしさの性役割次元で被験者に適確に認知されたといえ，刺激人物の提示による実験操作は妥当性があったと考えられる。8つの形容詞のうち2つの形容詞，「知的な」と「理性的な」については，女子の被験者に被験者の男らしさ×刺激人物の男らしさ・女らしさの交互作用がみられ〔知的な：$F(1, 38)=19.29$, $P<.01$, 理性的な：$F(1, 38)=6.92$, $P<.05$〕，ふさわしさ尺度や魅力の尺度と同様，刺激人物に対する評価（evaluation）に用いられたのではないかと思われる。

Table 4　Perceived trait types[1)]

	Male Subjects	Female Subjects
Chitekina	ns	ns
Kimochinokomayakana	F**[2)]	F**
Ishikyokona	M**	M**
Kensonna	F**	F**
Shokyokutekina	ns	F**
Riseitekina	ns	ns
Sennofutoi	M**	M**
Izontekina	F**	F**

Note　1) M : Perceived as Masculine trait
　　F : Perceived as Feminine trait
　　2) ** : $P<.01$

考　察

性役割態度の類似性・非類似性と魅力の関係についての仮説は，非常に限られた形で支持された。すなわち男子被験者の Hi 群と女子被験者の Lo 群においてのみ，同性に対する魅力の類似説が支持され，自分と類似した性役割態度をもった人物がより好ましいとされていた。また男子被験者の Lo 群と女子被験者の Hi 群で，異性に対する魅力の類似説が支持された。役割期待の観点から考えられた異性に対する魅力の相補説はいずれも支持されなかった。このように部分的に魅力の類似説が支持され，これが被験者の役割態度によって異なった対象に対するものであったことは，いくつかの原因が考えられる。

まず性役割の概念について考えてみよう。柏木（1973）によれば，性役割には3つのレベルが区別されねばならない。1）性役割行動，2）性役割観，3）性役割同一性である。性役割行動は，社会が自分の性に対して期待している行動や性格・態度などの特徴を実際どれだけ身につけているかということであり，性役割期待の実現度ともいえる。本研究で，被験者の男らしさ・女らしさとして測定したものがこれにあたる。またこのような役割行動は他者からの評価を伴っている。これは道徳や規範，伝統的な慣習などが判断の基準となっており，一般に社会的望ましさとして他者に知覚される。一方，性役割観は，その人自身の持つ性役割に関する価値観である。本研究で被験者が行なったふさわしさの評定がこれにあたる。さらに性役割の同一性については，自分自身が自分の性にふさわしい特徴を備えているかについての自己認識，すなわち自分自身の男らしさ(女らしさ)に関する自己評価であるといわれる。この3つのレベルのなかでも性役割観と性役割同一性は，能動的な人格形成に努め，自分自身の内的規範や主体性に基づいて自から行動しようとする青年期において特に重要なものである。

本研究では，ふさわしさ評定によって被験者の性役割観をみることができるが，各群によって興味深い反応の差が示されている。すなわち，ふさ

わしさ得点は二組の有意な交互作用を示しており，類似した役割態度を持つ人物をふさわしいとする傾向と，社会的望ましさを背景として，男らしい男性と女らしい女性をふさわしいとする傾向である。従って，それぞれの群の被験者は，自分の態度と類似し，しかも社会的に望ましいとされる人物を最もふさわしい人物と評定している。また逆に自分の態度と類似していても，社会的な望ましさは低いと考えられる人物に対しては，各群とも高いふさわしさ評定をしていない。これとよく似た反応傾向は魅力の評定にもみられ，各群とも自分と役割態度が類似し，しかも社会的望ましさの高い人物を最も魅力が高いとする傾向がみられ，性役割態度を手がかりとした魅力は，相手との態度の類似性と相手の役割態度の社会的望ましさの両方から影響を受けたと考えられる。

Ajzen (1974) は，いわゆる期待価モデル (expectancy-value-model) によって，未知の人物に対する魅力は，その人物のもつ属性についての信念と，その属性に対する評価 (evaluation) によって決定されるとしている。本研究における性役割態度やパーソナリティ特性など，人物の示すそれぞれの属性の社会的望ましさが問題になる場合には，非常に有効な理論と考えられる（中里，井上，田中，1975)。本研究で魅力の得点が，被験者の人物に対する評価を示すふさわしさ得点と非常に類似しており，直接の証明ではないにしても，この理論の有効性を裏付けるものと思われる。しかし，男子 Lo 群や女子 Hi 群の同性に対する反応などでは，ふさわしさよりも態度の類似性の影響を受けたとみられる部分もあり，これについてのより詳細な検討が必要である。

また本研究で相補説が支持されなかったことについては，実験状況における被験者と刺激人物の相互性が希薄であったことも原因していると思われる。Levinger (1974) は，交換理論の立場から実際場面を想定した二者関係の発展図式を提案しているが，本研究で用いた実験状況におけるような関係は，意識 (awarness) の段階，すなわち一方的で，相互作用のない社会対象に対して意識が向き始めた段階であるとされている。従って，このような相互作用前の段階では，期待される相互作用からの報酬よりも，一致的妥当性による報酬のほうが強いと考えられる。Grush et als. (1975) の研究では，より日常的な教師と学生の関係を取り上げ，役割に関連する特性において，ポジティブな非類似（相手が上まわる特性をもっている状態）が魅力の媒介要因となっていることを見出しているが，役割期待の概念を用いる場合には，少なくとも彼らの実験のように，具体的な相互作用が想定できる状況が必要だったのではなかろうか。

現在までのところ性役割と対人魅力の関係を取り上げた研究は数少ない。これについては，対人魅力の研究史も浅く，男女の性役割や男らしさ・女らしさの概念がようやく最近になって見直されてきたことも原因している。対人魅力の研究については，先に述べた通り非常な充実を見せており，現在はその統合が考えられる時期である (Aronson, 1969)。また発達心理学以外の分野でも，性役割に関する研究が急激に増加してきた（井上，1975；Mednick & Weissman, 1975)。このなかには，自己概念と性役割ステレオタイプとの関係をみた Rosenkrantz et als. (1968), Ellis & Bentler (1973), Spence et als. (1975) などの研究や，男性性と女性性について一次元性を主張する Constantinople (1973), これを二次元的にとらえて男女両性性をも考えようとする Bem (1974, 1975, 1976) の研究など興味深い研究がなされている。女性の役割が改めて見直され，若者の間にモノ・セックス的な人格構造がみられるといわれる現在（多田，1973)，青年の抱く性役割の概念は，彼らの対人関係に微妙な影響を与えていると思われる。充実してきた諸研究の結果をもとに，実証的な考察を進めることが今後の課題である。

なお本研究は，井上 (1975) の関西学院大学大学院社会学研究科修士論文の第一研究に加筆したものである。第二研究，第三研究があることを付記しておきたい。

要　約

最近，認知理論や強化理論に基づく対人魅力の研究が急激に増加している。特に Byrne らの強化理論に基づく研究では，態度の類似性と魅力の間に強い関係を見出している。最近では，役割期

待の観点から非類似と魅力の関係について研究が行なわれている。本研究はその一つである Seyfried & Hendrick (1973) の研究に基づき，性役割態度と対人魅力の関係について考察した。

仮説は次の通りである。

1）同性に対しては，魅力の類似説が妥当する。

2）異性に対しては，役割期待の点から男らしい男性と女らしい女性の魅力が高い。

3）従って，異性については，被験者の性役割態度によって，類似説と相補説のどちらかが支持される。

日本版 MMPI 性格検査に基づく興味関心調査票によって被験者の男らしさ・女らしさを測定し，調査票短縮版によって男らしい刺激人物と女らしい刺激人物を作成した。被験者は，同性もしくは異性の2名の人物を対人判断尺度によって評定した。

被験者は，男らしい役割態度を示す群（Hi）群と女らしい役割態度を示す群（Lo 群）に分類された。

被験者は，刺激人物の示す役割態度によって類似性を知覚しており，特性形容詞に対する反応からも，実験操作の妥当性が確認された。

ふさわしい評定では，各群被験者とも自分と類似する役割態度を持ち，社会的望ましさの高い人物を最もふさわしいとする傾向があった。

魅力評定では，男子 Hi 群と女子 Lo 群に，同性に対する魅力の類似説が認められ，男子 Lo 群と女子 Hi 群に，異性に対する類似説が認められた。

性役割を3つのレベルに分け，性役割観の点から，被験者のふさわしい評定と魅力評定が考察された。魅力の評定は，性役割態度の類似性と，役割態度のもつ社会的望ましさの両方から影響を受けていた。ふさわしさと魅力の評定が類似していたことから，Ajzen の期待価モデルの有効性が考えられた。また相補説が支持されなかったことについて，Levinger の二者関係発展図式から，実験状況における相互性の考慮が必要であることが指摘された。

参考文献

阿部満洲，住田勝美，黒田正大，Hathaway, S. R., Mckinley, J. C.，日本版 MMPI 質問票及び手引き，三京房，1963.

Ajzen, I., Effects of information on interpersonal attraction : similarity versus affective value. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1974, **29**, 374—380.

Aronson, E., Some antecedents of interpersonal attraction. In W. J. Arnold and D. Levine (eds.), *Nebraska Symposium on Motivation*. 1969, **17**, 143—173.

Baron, R., and Byrne, D., *Social Psychology : understanding human interaction* (2nd ed.). Allyn and Bacon, 1977.

Bem, S. L., The measurement of psychological androgyny. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 1974, **42**, 165—172.

Bem, S. L., Sex-role adaptability : one consequence of psychological androgyny. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1975, **31**, 634—643.

Bem, S.L., and Lenney, E., Sex typing and the avoidance of cross-sex behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1976, **33**, 48—54.

Clore, G. L., *Interpersonal Attraction : an overview*. General Learning Press, 1975.

Clore, G. L., and Baldridge, B., Interpersonal attraction : the role of agreement and topic interest. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1968, **9**, 340—346.

Clore, G. L., and Byrne, D., A reinforcement-affect model of attraction. In T. L. Huston (ed.), *Foundations of Interpersonal Attraction*. Academic Press, 1974.

Constantinople, A., Masculinity-femininity : an exception to a famous dictum?. *Psychological Bulletin*, 1973, **80**, 389—407.

Duck, S., *Theory and Practice in Interpersonal Attraction*. Academic Press, 1977.

Ellis, L. J., and Bentler, P. M., Traditional sex-determined role standards and sex stereotypes. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1973, **25**, 28—34.

深谷和子，性差意識の研究—父母の image と性的同一視について—，日本心理学会第29回大会発表論文集，1965, 312.

Griffitt, W., Attitude similarity and attraction. In T. L. Huston (ed.), *Foundations of Interpersonal Attraction*. Academic Press, 1974.

Grush, J. E., Clore, G. L., and Costin, F., Dissimilarity and attraction : when difference makes a difference. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1975, **32**, 783—789.

星野命，性役割獲得とその指導，児童心理，1968, **22**, 25—36.

Huston, T. L. (ed.), *Foundations of Interpersonal Attraction*. Academic Press, 1974.

井上知子，性役割の発達に関する最近の研究，心理学評論，1975, **18**, 1—13.

井上徹，対人魅力の研究—性役割を手がかりとして—，

関西学院大学 大学院 社会学研究科修士論文，1975，(未公刊).

柏木恵子，現代青年の性役割の習得，依田新他編，現代青年心理学講座5 —現代青年の性意識—，金子書房，1973，100—139.

Keppel, G., *Design and Analysis : a researcher's handbook*. 1973.

小橋川慧，幼児の異性役割行動に及ぼすモデルの影響，教育心理学研究，1967，**15**，34—41.

小橋川慧，清村武子，幼稚園児の女性役割行動に及ぼすモデルの影響，教育心理学研究，1968，**16**，1—6.

Lerner, M. J., and Agar, E., The consequences of perceived similarity : attraction and rejection, approach and avoidance, *Journal of Experimental Research in Personality*, 1972, **6**, 69—75.

Levinger, G., A three-level approach to attraction : toward an understanding of pair relatedness. In T. L. Huston (ed.), *Foundations of Interpersonal Attraction*. Academic Press, 1974.

Lott, A. J., and Lott, B. E., The role of reward in the formation of positive interpersonal attitudes. In T. L. Huston (ed.), *Foundations of Interpersonal Attraction*. Academic Press, 1974.

Mednick, M. T. S., and Weissman, H. J., The psychology of women : selected topics. In M. R. Rosenkrantz, and L. W. Porter (eds.), *Annual Review of Psychology*. 1975, **26**, 1—18.

中里浩明，井上徹，田中国夫，人格類似性と対人魅力—向性と欲求の次元—，心理学研究，1975，**46**，109—117.

Newcomb, T., *The Acquaintance Process*. Holt, Reinhart, and Winston, 1961.

Rosenkrantz, P., Vogel, S., and Broverman, D. M., Sex-role stereotypes and self-concepts in college students. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 1968, **32**, 287—295.

Spence, J. T., Helmreich, R., and Stapp, J., Ratings of self and peers on sex role attributes and their relation to self-esteem and conceptions of masculinity and femininity. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1975, **32**, 29—39.

Seyfried, B. A., and Hendrick, C., When do opposites attracts?. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1973, **25**, 15—20.

多田建治，パーソナリティに於ける男女性の次元—二元的試論—，心理学評論，1973，**16**，189—208.

Taylor, S. E., and Mettee, D. R., When similarity breeds contempt. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1971, **20**, 75—81.

Winch, R. F., Ktsanes, T., and Ktsanes, V., The theory of complementary needs in mate selection : an analytic and descriptive study. *American Sociological Review*, 1954, **19**, 241—249.

Winer, B. J., *Statistical Principles in Experimental Design* (2nd ed.). McGraw-Hill Kogakusha, 1971.